第 28 回：第 3 章−その 13−

The importance things between a father and his children

著　：渡辺修宏
企画：渡辺修宏
小幡知史
二階堂哲

「援助者」ではなく「父」として

対人援助の臨床において、どんなに勉強しても、どんなに経験を積んだとしても、決して「わかったつもり」にはなってはいけない。

自身の対人援助実践、つまり援助技術、視点、価値、捉え方などにおいて、過信、慢心、傲慢になってはいけない。

つまるところ、わからないことはわからない、目に見えないものは目に見えないということを、忘れてはならないということだ。

そのような当たり前のことについて、前回、サン・テグジュペリ作「星の王子様」と志村史夫著の「一流の研究者に求められる資質」をご紹介させていただきながら、述べた。

私たちにできることは、ただ、その時その場で最も大切なことをみつけようと、感じようと、触れようとするだけなのである。

そんな今の考えを整理していたら、ふと、対人援助職者としてではなく、別の自分についての思いが湧いて出てきた。それは、一人の父親としての自分である。

私には今、年頃の子どもがいる。

その子どもはいわゆる、反抗期真っ最中にある。

実は、子どもと話す際に私は、言葉選びにすごく難しさを感じる時がある。

何気なく放った言葉が子どもの感情的な反応を喚起し、予想もしない展開になることがままある。「そんなつもりじゃないのに（なかったのに）」というのは後の祭りで、次から次へと「望ましくない方向」に話が転がり、恨まれたり、憎まれたり、嫌われたりする。

そんな小さな出来事がほんの少しだけ生まれると、それが次のなにかの火だねにもなったりする。気づくと、あちこちに地雷が埋まっていて、どこをどう歩けば爆発をさけられるのか、もう、わけがわからなくなっている。

正直なところ、自分がまさかここまで「もつれる」とは、全く予想していなかった。もう少しうまく子どもとかかわれるはずだと思っていた。認めざるを得ない、ずっと、そしてまさに、「過信、慢心、傲慢」になっていたのだ。

もつれた後になって、子どもの心や気持ちはもちろん、親としてどのような文脈でどのようにふるまえば子どもの気づきや成長を促せるのか、「わからないことはわからない、目に見えないものは目に見えない」としみじみ感じているのである。

なんとなくどこかで聞いたことがあるような、そんなありふれた親子の話をしているが、当事者としては本当に思いも寄らない状況で、本当に困った立場に行き詰まっているのである。

「父」と「子」

子どものことをずっと考えていたら、自分が子どもだった頃のことを思い出すようになった。そういえば私は、自分の父親とほとんど一緒に暮らしたことがなかった。諸般の事情で、私が 4 歳か 5 歳のころから四半世紀以上、離れて生活してきたのだ。

母がしっかり者であったり、その母に似た姉がいてくれたから、また、母方の祖父もいたし兄弟も多かったことから、父不在の生活で特段困ることはなかった。もちろん、いろいろな不自由さはあったが、父に対してネガティブな思いを持つことはなかった。

ただ、時々会える父に対し、「お父さんは子どもの気持ちがわかってねーなー」と感じていた。子どもの成長過程を目の当たりにしていないのだから仕方ないと、受容する自分がいた。

例えば、幼稚園、小学校、中学校の絵画コンクールで毎回金賞をとる私に、「下手な絵だ」とコメントする父がいた。一般的に賞を得て親にそれ報告する子どもは、親に褒められると思うものである。褒められたいと思うものである。だから私はひどく落胆したのだった。ちなみに私は 9 年連続金賞を受賞し、私が作成した美術作品のいくつかは教育委員会から「お手本作品」に選ばれて教材になっている。もっとも今ではその才能のかけらも残っていない。多分この手のスキルのピークは 10 歳ぐらいだった。つまり私は早熟だったのだ笑。

また、例えば、男の子である私に、女の子が喜びそうな白いクマのぬいぐるみをお土産に買ってくる父がいた。あっちこっちで走り回って遊ぶ昭和の男の子は、白いクマのぬいぐるみをどうすればいいのだろうか。完全にピントがずれたお土産を受けとった私は絶句して、クローゼットの奥に大切に保管した。家に遊びに来る友達には見せられなかったのだ。

また、例えば、陸上部、サッカー部、空手道場に通う中学生である私に、まるで赤ちゃんをあやすようにプロレスごっこをしかけてくる父がいた。プロレスごっこにつきあってもらっているというより、こっちがつきあってあげているという状態であった。おそらく、父は私が中学生になっていることを理解していなかったのだろう。なぜならば、当時 14-15 歳になる私に対し、「この間は〇〇だったのに」と言い放ったからだ。父の言う「この間」とは、私が 3-4 歳の頃にプロレスごっこをした時のことらしい。ただ私には、もうその記憶がなかったのだが。

いくら離れて生活していたからとはいえ、途中で少しずつ気づくのではないだろうか。私は父と会うと、常にそう感じていた。そしてそのうち、「気づかない父が、父である」と認識するようになった。つまり父は、私からするとどこかずれていたのだ。

そしてそれは、今も変わらない。

今私は、自分の両親と、妻と子供と、いわゆる三世代世帯で生活しているが、そこで父は、(私からみると) まるで一人暮らしをしているような生き方をしている。他人のことなど考慮しない (ようにみえる)。自分のペースを堅守して、周囲を自分のペースにあわさせているのだ。たぶん父本人は、自分の配偶者、子ども、孫が父にあわせようとしていることにすら、ほとんど気づいていないだろう。

もっとも (あえて述べるが)、そんな父を批判する気は毛頭ない。父は (ギリギリ) 戦前生まれの人間である。その世代の男の大半が「そういうもの」であるということは私も知っているし、もっと「なにもやらない男」を見聞きしてきているから、父は「そう悪いケースではない」と思っているからである。

ただ、「お父さんは子どもの気持ちがわかんねーなー」という感覚は、昔も今も変わらないだけである。

人の話を最後まで聞かない。

自分の非を認めない。

自分に甘く、他人に厳しい。

すぐ怒る。

他人に言っていることと、自分でやっていることに大きな乖離がある。

…などなど、いろいろ思うところがあるのである。

そして、そう感じつつ、ふと冷静になって、「もしかして俺も、自分の子どもに同じように思われているのかもしれない」と考えるのである。

正直、子どもとこんなにももつれることがなかったら、このような考えなど浮かぶことはなかっただろう。迷える今だからこそ、自問自答して、いろいろと自分が試されているような気がするのである。

「父」と「私」

私は (父と違って)、自分の子どもが新生児、乳幼児だった頃に、おむつ交換も、お風呂も、ミルクも、寝かせつけもやった。えらそうにいうつもりはない。妻のほうがすごい重責を背負っていたから、私の役割など微々たる範囲である。当たり前のことをできるだけやっただけである。

第 2 子が誕生してまもなく東日本大震災が起こったから、あの頃はミルクを手に入れるのに大変な思いをした。物流がとまって入手できなくなったからだ。一部破損となった実家に皆で避難して、暖房器具がない中で布団にくるまってみんなで温まったことをよく覚えている。子どもの成長を、生活を、命を守るためにどうすればいいかという気持ちでい

っぱいだった。

私は父に 1 度も来てもらったことがなかったが、子どもの遠足、授業参観、合唱コンクール、プール、ドッジボールの練習や大会、ピアノの発表会、野球の練習や遠征にできるだけ付き添った。子どものために、父母会等の役員も何回も引き受けた。

自分はやってもらったことはないけど、自分の子供のためにやってあげたことは山ほどある。自分で経験できなかったことを、数えきれないほど自分の子供に与えた。

そう、私は自分の父親と違って、子どもに対して親としての役割を可能な限り担ってきた。授業参観にも、親子体験にも、運動会にも、陸上競技会にも、サッカー選手権にも、空手大会にも、ありとあらゆる親子行事に、父には一度に来てもらったことはないが、私は自分の子どものそれらに、基本的にすべて参加してきた。もちろん、料理も、洗濯も、お風呂掃除も、自宅でやるべき家事の担い手として務めてきた。

だから私は。

だから私は、過信、慢心、傲慢した親となったのだろうか・・・？

親としてうぬぼれてしまったのだろうか。

「父」から「子」へ

そういえば、キングスレイ・ウォードが著した「ビジネスマンの父より息子への 30 通の手紙」という本があった。日本語版を読んだのか、原著である「Letters of a businessman to his son」を読んだのか、あるいは、書評をみて読んだ気になっているのかは定かではない。たぶん、「読みかけ」だと思う。

以前もご紹介した通り、私は 1999 年から読書記録をつけている。そしてその中に、上で記した日本語版も英語版も記されていない。だから読了していないのだ。しかし、本自体はここあり、適当に読んだ跡があるので、少しだけ読んで放置したままなのだろう。

中途半端にしか読んでいないので正しい理解も記憶もしていないが、ただ、印象として次のように感じている。

つまり、親から子どものメッセージは、だいたいすぐには伝わらないのだ。

そして、だけど、親から子どもに伝えるべきメッセージはたくさんあって、そしてとても大切で、決して欠かすことができないことが、いっぱいあるのだ。

今私は、父親として自身の子どもに、どのようにメッセージを伝えるべきかと、試されている。もしかしたら、自分の父親からそれらをうまくキャッチできなかった過去が、今の事態の難しさを生んでいるのかもしれない。つまり、私が今感じるこの思いの源は、私自身がはるか昔から生み育ててきたことなのかもしれない。もしそうだとしたら、私は、過去の私自身から何かを学ばなきゃいけないような気がする。

否、あるいは、そのようことは、ただの考えすぎかもしれない。行き詰まった私自身が、どこかで聞きかじったような論理を自分にあてがっているだけかもしれない。

どちらにせよ、自分の子どもに伝えることは簡単ではない。だけど、避けて通れない道で

もある。
前回の記事で述べたように、ここでまた、「星の王子様」に登場するワンフレーズを思い出す。

Only the Children know what they are looking for
「なにを探しているかは子どもたちだけがわかっている」のである。

再び、「星の王子様」に教えられる。

そういえば、その「星の王子様」には続編がある。
映画「リトル・プリンス　星の王子さまと私」がそれにあたる。
ただし、著者が亡くなった後につくられた作品だから、正統な続編とはいえないかもしれない。賛否両論があるが、「星の王子様」に対する愛情やリスペクトあふれる作品ではあると思う。「星の王子様」の後、王子はどうなったのか？知りたい人には一見の価値があるだろう。
そして、この「リトル・プリンス　星の王子さまと私」もまた、親と子の物語である。つまり、親のメッセージが子どもにどう伝わるかを描いている。
The things that are most important cannot be seen with our eyes.

－つづく－